

『妄想』 作：ポチ子

『妄想』 作：ポチ子

すごく有名になって、

皆にちやほやされる妄想をする。

ファンに手を振ったり、

インタビューに答えたり、

ドラマの番宣をしたり、

それっぽい事は全部想像した。

そうしたからって、

普段の自分は、

地味でダサイ奴のままなんだけど。

この小さい部屋の中では、

大スターになれる。

その瞬間が好きだ。

燃えるごみの日に出し忘れて、

ゴミ袋が放置されている床が、

自分を輝かせるステージに変わる。

まぶしいスポットライト、

観客の拍手を、

全部、独り占め。

意味がない、無駄だって、

『妄想』 作：ポチ子

切り捨てる人もいるけれど、

私はこの瞬間が好き。

— 終わり —